

## 脱中心化を通じた自律の達成

自律喪失と意味喪失についてのアドルノのテーゼを接続する試み

守 博紀(一橋大学)

本発表の目的は、《脱中心化を通して達成される自律》というアイデアを、自律および自由についてのアドルノの思考を手がかりにして提示することである。ここで脱中心化とは、大まかには、《世界や自分自身について安定した意味を付与できる主体》という考え方を放棄することを意味する。この脱中心化という考えの源泉のひとつはフロイトに求められるのだが、アドルノはこの考えを受け継ぎつつ、そこから二つの(一見したところ無関係な)帰結を引き出している。それは、現代社会における自律の喪失と、現代芸術における意味の喪失である。そこで、まずは、両者に共通する背景として脱中心化があることを指摘することが本発表の第一の課題となる。ついで、私は、意味喪失という状況に応答する芸術上の試みについてのアドルノの解釈から、社会的な自律喪失という状況に対する応答の手がかりとなるアイデアを引き出したい。これが第二の課題となる。

第一の課題を果たすためには、社会的な自律喪失と芸術上の意味喪失ということそれぞれのようなことが考えられているのかを明らかにしなければならない。そこでまずは、自律についてのアドルノの考えを確認することから議論を始める。

アドルノは自律についての基本的な考えをカントから引き継いでいる。そのさい重要になるのは反省性と法則性である。すなわち、《反省によってある行為をする理由に到達すること》、かつ、《その理由が私個人にのみ該当するような理由ではなく、その行為をすべきだという規範的な主張をそれに基づいて行えるような理由であること》、これらの点が、自律的であるために要請されるのである。しかし、自律という考えに対するアドルノの姿勢には、一見したところ矛盾する両面性がある。

一方には次のような発言がある。「アウシュヴィッツの原理に抗するただひとつの真なる力は、カントの表現を用いてよろしければ、自律でしょう。それは反省する力、自己決定する力、仲間入りしない力のことです」(1966年の講演「アウシュヴィッツ以後の教育」)。ここでアドルノはカントの概念を援用して、アウシュヴィッツに象徴される悲惨な事態を繰り返さないためのあり方として各個人に「自律」を要請している。他方には次のような発言がある。「社会は諸個人を——諸個人の内在的生成過程さえも——諸個人が現にそうであるものへと決定している」(『否定弁証法』)。ここでアドルノは、自分で自分のあり方を決定するという意味での自律が現在の社会のなかでは不可能になっている、という考えを提示している。後者の発言を真剣に受けとめるならば前者の発言は自律という理念へのリップサービスのように思われ、前者の発言から自律概念へのアドルノのコミットメントを引き出すならば後者の発言が障害とならざるをえないように思われる(近年では、《個人の自律が社会的に不可能になっている》という後者の論点がとりわけイェプセンによって強調されている)。

発表者の考えでは、この矛盾する両面性は見かけ上のものに過ぎない。ここで私はホワイトブックのフロイトおよびアドルノ解釈に部分的に依拠する。ホワイトブックのフロイト解釈のポイントは、脱中心化というものを、(自律的な個人に反対するのではなく)自律的な個人の形成の本質的契機として理解するという点にある。そして、ホワイトブックは、自律についてのアドルノの議論もこの延長線上に捉えようとするのである。

脱中心化が自律の達成のための契機であるという点で私はホワイトブックに同意する。しかし、ホワイトブックはフロイトの「昇華」のアイデアを(アドルノの明確な拒絶にもかかわらず)アドルノに帰しており、この点には解釈上の無理が生じているように思われる。とりわけ問題となるのは、ホワイトブックの言う「昇華」のアイデアが、《規範の内面化による自律の達成》というアイデアと親和的であるということだ。たしかに、このような自律の捉え方には一定の説得力があり、また、自律や自由の無制約性を批判するアドルノの議論にはこのような考え方が含まれているように見える(実際、パディソンやユッテンなどのように、この考えをアドルノに積極的に帰する論者もいる)。しかし、この考えを単純にアドルノに帰することはできない。むしろ、私は、《社会的な諸規範と主体との調和は不透明で問題含みのものとならざるをえない》というアイデアをアドルノ読解から引き出したい。社会的な自律喪失ということと考えられているのは、この規範と主体の関係の不透明さのことである。

それでは、このように捉えられた自律の喪失は、芸術上の意味喪失とどのように関わるのだろうか。その手がかりは次の発言にある。「こんにちにおける美的な意味の破棄通告は、芸術作品の外的および内的な模写性の破棄通告と表裏一体になっている」(「芸術と諸芸術」)。「模写性」とは個々の芸術作品が外的世界や制作者の内面を描写するあり方のことである。具体的には、音楽の表出性、造形芸術の具象性、文学における物語上の連関などが考えられる。すなわち、模写性の喪失とは、それぞれのジャンルにおいてこのような描写機能の役割が後景化するという事態のことを指している。それはまた、《なぜ画面上のこの部分にこれが描かれているのか》、《あの主題とこの主題にはどのような関係があるのか》、《なぜこの人物はこの場面でこのような行動をとるのか》といったことが不明瞭になるという点で、意味上の連関が失われる過程であるということもできる。これが、美的な意味喪失ということの問題になっている事態である。

本発表では、この意味喪失というアドルノの考えを、単なる芸術上の議論としてではなく、近代における脱中心化——世界や自分自身について安定した意味を付与できなくなったこと——を背景としたより普遍的な現象に関わる議論として取り上げる(こうした解釈はヴェルマーもやっている)。このような解釈によって、《なぜしかしかなのか》という理由を求める問いに対して明確な解答を与えることが困難になっているという脱中心化の状況を、社会的な自律喪失と美的な意味喪失の共通の背景として扱うことができるようになるのである。その狙いは、この試みによって、自律について考えるための素材を新たに発掘することにある。

実際、アドルノが『美学理論』のなかで意味喪失について論じている箇所は、自律について考えるための興味深い素材を提供してくれる。そこではケージの《ピアノとオーケストラのためのコンサート》(1958年初演)が「鍵となる現象」として挙げられている。それによれば、この作品は「仮借ない偶然性を法則(Gesetz)として自らに課し、そしてそれによって、意味のようなもの(etwas wie Sinn)を、驚愕の表現を受け取る」音楽作品であるとされる。いわばケージは、脱中心化を背景とした事態のただなかで反省し自らに法則を課すというしかたで、《脱中心化を通して達成される自律》のモデルになっていると考えられるのである。そこで、本発表は最後に、こうしたモデルが社会的な自律のあり方として何らかの意味で一般化できるか、できるとしたらいかにしてか、ということ考察する。